



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano ©転載許可済  
©1985 精道教育促進協会 (芦屋)三・三四五二芦屋市船戸町12-6

# 教皇様の殷

## 信仰の旅路

マリアのように私たちも神の霊に心を開きましょう。

今、私たちは、マリアの聖なる場所で神を待ち構えています。預言者イザヤ以上に、マリアは神の近くに居るとはどういうことかをよく知っていました。マリアは専心する心をもった処女です。主の事柄のみがマリアの関心事であり、行ないと思いで神のみをおよこばせすることしか考えなかったのです。(コリント①7・32〜34参照)しかしそれでも、マリアにも聖なる畏れがあり、神の使信を耳にして「心を騒がせた」のでした。神はこの乙女を選び、みことば(御子)の住居とするため彼女を聖化なさいました。

高貴なシオンの娘マリアは、だれよりも身近に神の「力と栄光」を体験しました。マニフィカトのなかで、マリアは喜びと感謝の叫びをあげました。「私の精神は救い主である神によって喜びおどっています。(…)全能のお方が私に偉大なことをなされたからです。」マリアは被造物としての自分をよく知っています。「主がいよいよはしために御目をとめてくださいました」と。また、代々の人々が幸いな女と呼ぶだろうことも知っていたので

す。(ルカ1・46〜49参照)しかしマリアはイエズスを指し示し、「あの人の言う通りになさい」と教える。彼女の関心事は主に関する事柄のみですから。つねに神のみ旨のままに動く心構えをもつマリアは「信仰の旅路に進んだのです。」(「教会憲章」58)ナザレトのマリアは神の測り難いなさり方を信仰の目で眺める。自らに超こつたことを「心のなかで」思い巡らせる様子をルカは二度も強調しています。(ルカ2・19、51)マリアのこのような信仰は幸いと称えられました。「信じた人は幸せ」と。(ルカ1・45)

### 神を求める

みなさん、マリアの信仰の旅路をたどりましょう。マリアのように、主の事柄に心を開きましょう。私はこの招きをすべての方々に送ります。司教、司祭、助祭、修道者、信徒のみなさん、私たちは全員、生きる神を体験したいものと強く望んでいます。このあこがれに魅かれて度々、大勢の男女がキリストに忠実を保つ道を歩みました。ここアインジー

テルンは、神がこの世に現存されることを体験せんものと訪れる、大勢の巡礼者のあこがれに満ちているのではないでしょう。神の現存を求める人々はこの祈りの雰囲気にとたることが出来ます。(…)大勢の巡礼者たちは自らが助けを必要とする罪人であることをよく自覚していました。彼らはマリアと共に、神とその霊に心を開きつつ祈りにひたっていたのです。

信仰はこのように進みます。祈りに変えられた生きる信仰、神との個人的な交わりが…。祈りの交わりを求める人、とくにマリアに近づく人は、霊の雰囲気と導き入れられます。マリアはすでに恩寵と霊の賜を受け入れました。(ルカ1・28、35)マリアのように私たちは神の霊に心を開きましょう。神の御力を体験し、人々に仕え、証し人となるにふさわしくなることができるでしょう。(…)

### 信仰の旅路

マリアは神の現存を直ちに体験することができました。「主御身と共にまします。」マ

リアは、救い主の母たる使命に値するか否かを考える前に、恩寵を受け入れたのです。かくしてマリアは、救いのみわざに協力する、と無条件で答えました。「私は主のはしためです。おことばの通りになりますように。(ルカ1・28〜30)マリアは考えた上で行動しました。しかし、条件をつけるようなことはしませんでした。つねに神のおそばに居ましたから、いつ何時でも役立つことができる状態にいたのです。謙遜の心で彼女は「信仰の旅路に出ました。」信仰の旅路を歩む私たちに優しい母としてつきそってくださるために。

みなさん、イエズスの御母であり、同時に教会の、そして私たちの母であるマリアをこの世の旅路の伴侶、私たちの模範と認めましょう。どのような状況におかれても、つねにマリアと共に、神を待ち構えたいものです。この神の視線のもとで、「私はここにおります。私をおつかわしてください」と申し上げましょう。神と人々に仕えるために、「おことばの通りになりますように」と。アーメン。(スイスのマリア信心地、アインジューテルンで)



# 生活改善の 具体的な償いが必要

(教皇様はコロサイ人への手紙(3・5)ももとに次のお話をなさった。)

「地上にあるもの……を殺せ。」(3・5、10)使徒聖パウロのこの言葉は、四旬節の始めにあたって行なわれる灰の儀式と深い関係があります。四旬節、それは、とくに償いの時期、秘跡に与る時期です。

キリスト信者の生活は「犠牲の生活」です。教会は母の知恵に基づいて償いの季節を定めました。「信者がとくに、祈りに専心し、信心と愛のわざに精をだし、自分の義務を忠実に果たす、なかでも、大斎と小斎に励んで自己を否定し、慈悲と愛のわざに勤むために定めた時期である。」(教会法120参照)

四旬節は、各地の司教協議会の定めに従い、毎金曜日に肉あるいは他の食物を控える義務に加えて、(日本では愛徳のわざや祈りに替えることができる)、灰の水曜日と、イエズス・キリストのご受難とご死去を記念する聖金曜日とに、大斎と小斎とを守らなければならぬ。(教会法120参照) これらの規定は信者として絶対に欠くことのできない最低限度を定めています。償いそのものは、信仰生活から切り離し得ないもの、寛大な心で具体的に実行すべきことです。(…)

## 生活改善のあらわれ

ここで私は、特別の償い、つまり赦しの秘跡と密接な関係にある償いについて、一緒に考えてゆきたいと思えます。(…)  
私たちは、神の御助けのおかげで、「あわれ

みの秘跡」に近づき、罪の赦しを受けます。しかし、その前に、実際の償いを受けて、それを神の恩寵のもとに果たさなければなりません。

ところがこの償いは、神が罪を赦すことによってお与えになった賜の代償であるかのように考えることはできません。「償い」とは生活改善の具体的なあらわれであり神の新たな御助けを得て実行に移すべきものであるゆえ、償いを祈りだけに留めてしまふことはできないのです。罪によって混乱をひきおこされた分野での償いも必要であるということです。聖パウロは次のように教えています。「淫行、汚れ、情欲、邪欲、偶像崇拜である肉欲を殺すがい。これらのことは神の怒りを呼ぶ。」(コロサイ3:5、6)

## 根の深い混乱

償いは赦しの秘跡と関係があり、またその秘跡から出ることで、特別な効果をもっていることは確かですが、それだけでなく信仰生活において犠牲が果たすゆたかな役割と意味を明らかにしてくれれます。キリスト教とは陰気なることを目指すのではありませんが、犠牲を含んだよろこびと平和の宗教なのです。

原罪は洗礼によって赦されますが、普通の場合、混乱、つまり罪への傾きは残ります。そしてそのような傾きは、神の恩寵のみならず、私たちの努力がなければ克服できません。(トリエント公会議「義化についての勅令」カトリック教会文書資料集、通称デンツンガー1535) 告解の秘跡は罪をゆるしてくれます。とは言え、神が人間の心に刻み、かつ啓示によって完成してくださった法の実行にあたって遭遇する困難を取りのぞいてくれるわけではありません。私たちにまだまだ罪を犯す可能性、罪への傾きが残っているのです。(ト

# テクノロジーは 真に人間のためになるもの

1 悲しみの聖母マリアの記念日は、昨日の聖十字架称讃の祝日とつながりがあります。ゴルゴタでの十字架の秘義と、十字架につけられた御方の御母のみ心における十字架の秘義は他に解釈のしようもありません。つまり私たちの信仰では、永遠の知恵という見方に立ってのみこの秘義が明らかにされるのです。

実にこの秘義は、地上での人々の運命のただ中で、人間の歴史における特別な一条の光となっています。何よりもこの光は十字架につけられたキリストのみ心の中にあり、特別な愛の力によって反射され、十字架のもとにた

たずむ悲しみの聖母のみ心の中で輝きます。というのも、知恵はまた愛をも意味するからです。愛のうちに最も熟した知恵の果実があると同時に、そのもっとも豊富な源があるのです。

人間は、十字架のすぐ下に立っておいでになった聖母のみ心を通して永遠の知恵に近づき、十字架につけられたキリストにおいて永遠の知恵を共に分かちあう者となりました。「イエズスの十字架のかたわらには、その母と、母の姉妹と、クロパの妻マリアと、マグダラのマリアが立っていた。」(ヨハネ19・25)

リエント公会議デンツンガー1536、1568、1573参照) その結果、人間生活、とくにキリスト教的な生活をしようと思えば、つねに悪に対する戦いをつづけなければならぬのです。(第二バチカン公会議「現代世界憲章」No.13・15) というわけで、キリストのうちに再生した状態にふさわしく、主なる神と隣人への愛を一層深めるために、真剣に修徳のための戦いをすることが信者に要求されます。耐え忍ばざるを得ない苦しみや、福音の勧めに合わせずみずから自由に求める苦しみは、キリストのご受難とご死去、ご復活に与るべく、キリストとの一致のうちに実行しなければなりません。こういう生き方をすれば、私たちも聖パウロと共に繰り返すことができるでしょう。「私は今あなたたちのために受けた苦しみを喜び、キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの苦しみの欠けたところを満たそうとする。」(コロサイ1・24)

救い、助け、解放を求める叫び  
2 ききのうの聖十字架称讃の祝日より、本日の典礼はとくに「人間的な」面を強調しています。これは不思議なことではありません。なぜなら、聖母マリアの人間のなみ心と、聖母のそばにおられる神であり人間であらせられる御子の人間的なみ心が、そこに反映されているからです。  
ヘブライ人への手紙の中に、キリストに関する次のようなことが見られます。「キリストは地上での生活の間、大声の叫びと涙をもって、ご自分を死から救うことのできるお方に祈りと祈願をささげられた。」(ヘブライ5・7) これによって私たちは、ゲッセマニでイエズスが、できれば杯を取り去りたまえ(マテオ26・39参照)とお祈りになられたときのあの祈りを思い出すのではないでしょうが。

# 説教・講話・書簡等の抄記

兄弟姉妹のみなさん、今日の典礼中に悲しみの聖母とともにおいでになるキリストは、人類——テクノロジーがもたらすはずのもの——とその問題点に大いに巻き込まれ、テクノロジーの長として、あの「大声の叫びと涙をもって祈りと祈願」をおささげになっています。キリストは御父に、世界の救いと、御自らの母であり私たちの母である聖母の愛につつまれているゆえより人間的な新しい地球の建設を求めて、叫び続けておられるのです。

同じヘブライ人への手紙の中に次のような一節があります。「キリストは子であったのに、その苦しみによって従順を学ばれた。ヘブライ5・8」別の場合に聖パウロは、キリストは「死ぬまで従われた」(フィリッピ2・8)と書いていますが、ここでは「キリストは従順を学ばれた」と書いています。

そして御子キリストと共に、以前「私は主のはしためです。あなたのお言葉のとおりになりますように」(ルカ1・38)とおおせになった御母も、従順を学ばれました。

3 御子と御母の心からのこの叫び、人間の目には十字架を拒絶するかに見えるこの叫びは、きょうの典礼の詩篇の中でさらに深く描かれてあります。救いと助けと悪の網からの解放を求める叫びです。「主よ、私はあなたのうちに逃れる、永遠に恥を受けぬように。正義をもって私を解き放ちたまえ。……私を救いに急ぎ、私の身を隠す岩となり、逃れの固き城となられよ。あなたは私の岩、私の砦である、私に張られた網を破りたまえ。……私を解放し、敵としたいげる者の手から救いたまえ。」(詩篇31(30)・1・3、5、16)

詩篇のことは御子と御母のみ心の人間的な真実のすべてを反映しているゆえ、神に完全に委ねるといふ行為、すなわち神への献身をも表わしています。この献身は、解放を求める叫びより、一層力強いもの。

「私は御手に魂をゆだねる。真実の神よ、あなたはすでに私を救われた。だが、主よ、私はあなたにより頼み、あなたは私の神」と言う。(詩篇31(30)・5、14)

「あなたは私の神。私は御手に魂をゆだねる。」この認識が十字架に「上げられた」御子のみ心と、人間的な見地からすれば御子が十字架につけられたことによって虚脱状態であるはずの御母のみ心を、支配しています。

## 十字架の称讃

4 ヘブライ人への手紙には次のように記されてあります。「キリストは祈りと祈願をささげ、その敬虔があつたから聞き入れられた。……完全なものとされて、ご自分に服従するすべての人の永遠の救いのもととなられた。」(…)永遠の知恵はキリストの聖十字架が含まれているすべてのものを包み込んでいます。「私はいと高き者の御口から出、蒸気のように地を覆った。」(シラ24・3)

それはすなわち、本来なら愛と呼ぶべき永遠の知恵の秘義によって全世界が覆われたという事です。「神は御独り子を与えられたまうほどこの世を愛された。」(ヨハネ3・16)

さあ、ごらんください。愛のために「自らを捧げる」まさにその瞬間の出来事を。御子と御父が、御父と御子が完全に一体となっておられる十字架上の高みから、御母の存在と、永遠の知恵の秘義における御母の特別な参与とを立証することばが響きわたる。イエズスはおおせになります。「婦人よ、これがあなたの子だ。」十字架のもと、マリアのそばにはイエズスの愛された弟子のヨハネが立っている。(同上19・26参照)そしてイエズスはおおせになる、「これがあなたの母である」と。これらのおことは、福音書の著者としてヨハネ自らが書き残しました。そして次のように続けています。「その時からその弟子は、マリアを自分の家に引き取った。」(同上19・27)

キリストは青年に語りかける

「あなたたちのうちにある希望の理由を尋ねる人には、優しく、敬って常に答える準備をせよ。」(ペトロ1・3・15)

使徒聖ペトロが初代の信者に書き送った言葉はイエズス・キリストの福音全体と関係があります。福音史家たちが書き記したあの金持の若者とキリストとの会話(マルコ10・17・22、マテオ19・16・22、ルカ18・18・23参照)を読めば、この関係がもつとはっきりするでしょう。

聖書の数あるテキストの中でもこの箇所は特に今考えるべきものと思われまふ。

「よい先生、永遠の生命をうけるためには何をすればよいのでしょうか。」この質問に対して、イエズスも質問でお答えになります。「なぜ、私をよいと言うのか。神ご一人のほかによい方はない。」次いで、「あなたは、殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、不正をするな、父母を敬え、という掟を知っているだろうか」とおおせられ、こうして十戒のいくつかの戒めを思い出させました。

ところで、会話はまだ終わっていません。青年は答えます、「先生、私は小さい時からそれらをみな守ってきました」と。そこで福音史家は書き記しています。「あなたには一つだけ足りない。帰ってあなたの持ち物をみな売り、貧しい人々に与えよ。そうすれば、あなたは天に宝をつむだらう。それから私についてきなさい。」(マルコ10・20・21)この時点で出合いの雰囲気は一変します。福

## 国際青年年にあたって 教皇様のメッセージ 1985・3・31

音史家は、「その人は、この言葉を聞いて心配し、悲しそうに去っていった。彼は大金持だったからである」(同上10・22)と書いています。このほかにもナザレトのイエズスの若者との出合いを描写する章句があります。なかでもすぐ思い出すのは、ヤイロの娘(ルカ8・49・50参照)とナイムのやもめの息子(同上7・11・17)のよみがえりの場面でしょう。しかし、金持の青年の話ほど中身の濃い出会いはありません。この出会いはより普遍的で時間を超えた性格を備えています。ある意味で、世紀と世代を超え、常に、いつまでも有効な内容を有すると言えるでしょう。キリストはこのような仕方、青年たちにお話になる。世界中の色々なところで、色々な国や民族、文化のなかで、キリストは人々に語りかけるのです。みなさん方青年の一人ひとりには、キリストがお話かけになる相手になりうるのです。

同時に、場面の描写と双方の口から出た言葉には、断然本質的というべき意義と独特の重みがあります。この場面にあらわれる言葉は人間一般についての真理、なかならず青年に関する真理を含んでいます。とくに若者にとって大切な言葉なのです。というわけで、私の考えをイエズスの若者との出合いの場面に結びつけて述べたいと思います。こうすればみなさん方青年にとって、キリストとの話を進めるのに大いに役立つと思うからです。みなさん方青年にとって、キリストとの話し合いは、根本的に重要なことなのです。(このあと、青春は宝、神は愛、永遠の生命、倫理性と良心などの話がマルコ第十章に合せて続けられます。)

# 不変の教え

## 信仰と道徳

### シリーズII

「信じて洗礼を受ける者は救われる。」(マルコ16・16)  
 「まだ聞かなかつた者をどうして信じられよう。」(ローマ10・14)

1 本日はふたたび新約聖書の二つの文章に触れ、カテケージスについての話の序論を続けたいと思います。聖霊降臨の日、シモン・ペトロは、十字架につけられ、聖霊の力によって復活したイエズスについての真理を告げて、三千人の人たちに信仰をおこし、洗礼の準備をしました。ペトロのケリグマは、初期のカテケージス、とくに洗礼準備のカテケージスと考えられます。かくして、「信じて洗礼を受けた人」(マルコ16・16参照)についてのおことばが確認されたわけです。しかし同時に、神のおことばを告げること、またそれを聞き入れることが信仰を得るための必須条件となります。聖パウロが「聞かなかつた者をどうして信じられようか」と言っているように。

#### カテケージスとは

2 聖霊降臨の日にエルサレムで誕生した教会は、「使徒たちの教えに専念しました。」これは、教える人と教えを受ける人との信仰における出会いを意味します。実はこれこそ、ギリシャ語の「カテケオ」の意味なのです。語源的には、「上から呼ぶ」あるいは「こだまを呼び起こす」(kata-上から, echein-表わす、響く)の意味から来ると考えられます。そこから「教える」という意味が出てきたのです。(教える人の声が生徒の声にこだまするとき、

生徒の応答はいわば教える人の意識的なこだまであるということですから。この最後の説明は、すこぶる重要です。カテケージスのような指導は、講義のように一方的に与えられるのみでなく、質問と応答という風に対話でなければなりませんから。

こういう意味をもつカテケージスは、新約聖書、のちに、教父たちの著作に数多く現われます。この言葉と一緒に現われるのに「カテクメノス」(洗礼志願者―教えを受ける人)があります。ここではもちろん、信仰の真理とその真理に則った行動の規範を学ぶ人という意味で使っています。「カテクメノス」とはまず第一に、「信じて洗礼をうける」というキリストの指示に従って、洗礼の準備をする人を示しています。この精神で、聖アウグスティヌスは、カトリック求道者のことを「受洗予定者」、「洗礼を目指して信仰とキリスト教的生き方に導き入れられる人」、「カテキサンディプス・ルディプス」と呼んでいます。

#### 信仰と洗礼

3 「カテクメノス」(洗礼志願者)という語(および間接的には「カテケージス」という言葉)の特定化(限定化)でもありますが、(…)された意味は、初代信者の慣行と一致しています。聖霊降臨の日エルサレムで起こったように、初期の時代において、信仰を得て洗礼を受けた人は成人でありました。洗礼を受ける前に普通二、三年をかけて充分な準備をしていたのです。同じことは現在も、とりわけ宣教国に見られ、洗礼志願期を設けておとなの洗礼の準備をしています。初代からこの準備は、信仰の真理とキリスト教的生き方の根本を教えるだけでなく、洗礼志願者を徐々に

教会共同体に導き入れることを目的としていました。カテケージスとは、「入信」、つまり洗礼の秘義への導入、さらに、ご聖体の秘跡を頂点とし中心とする秘跡的生活全体への導入をあらわしていたのです。

洗礼の儀式書をよく注意して読めば、洗礼は、根本的で深い回心の効果的なしるしであることが容易に了解されます。洗礼を受ける人は使徒信經に従い信仰告白をするだけでなく、「悪魔とその栄華とそのわざ」をすてます。それによって、受洗者は自らを生きる神にささげるのです。洗礼は、人間の根本的な聖別であります。聖別によって彼は、イエズス・キリストにおいて、また、秘跡内で働く聖霊と共に(水と霊によって生まれる)「ヨハネ」(5参照)、御父にささげられるのです。聖パウ

## 黙想のしおり ⑥

### 二つの和解

キリストの贖いのみわざがもたらすのりと考えてみれば、二つの和解、つまり、神との和解と人間同志の和解との間には深いつながりのあることがよくわかる。

人間が神と和解するならば、それはすなわち、人間同志の和解が実現したことになる。

聖書に啓示されているように、罪を犯すと人間は神から離れ、挙句のはてには人間同志の分裂を生じる。神と敵対したり、神と袂を分かつたりすれば、人は仲間からも離れてしまふ。

#### 召しだし

よく祈り、よく黙想して、将来の進路を決

口は、洗礼水につかることを、キリストの贖いのための死に浸され、キリストの復活にあらわれる超自然の生命に新たに与ることの象徴と考えています。

#### 初代から

4 以上は、キリスト教の始めから、志願期、洗礼授与、ご聖体への参加、ついで秘跡全体への参加、という風に、カテケージスがいかにかに深い意味を有し、かつ実践されていたかを教えてくれます。教会はたえず、「使徒たちの教えに専念」したわけですが、そのあらわれとしてカテケージスは、自然の成行として「志願期」を超えて行なわれるようになりました。信者のみなさんにキリストの秘義に関する一層深く確かな知識を与えるためであったのです。

定しなさい。主のみ声の心底で聞こえたならば、すぐに耳を傾けなさい。今日、主の声を聞けば、心をかたくなにしてはならない。(…)主のみ声の微妙なあやと響きをことごとく理解して欲しい。主はあなたをどこへ呼んでおられるのだろうか。イエズス・キリストのみちみてる背丈に従ってキリスト教的生活をせよと言われているのは無論である。がしかし、もっと直接的に救いのみわざに与るよう召されていることも大いにありうるから。

イエズスのあとなら、どこにでもついてゆくと心から言えるだろうか。イエズスは自分をささげてくださいましたが、私はどの程度じぶんをささげていると言えるだろうか。無私の心をもっているといえるだろうか。キリスト、人々、教会に仕えるために。キリストが十字架で示してくださいましたように。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393